塩竈市文化財調査報告書第 3 集

杉の入裏窯跡

平成 2 年 3 月

塩竈市教育委員会

序

今回行われた『杉の入裏窯跡』発掘調査につきましては、地権者および各方面関係機関より全面的なご理解ご賛同を賜り厚く御礼申し上げます。

昭和63年に調査実施した本遺跡は、丘陵上と海浜に立地しております。海浜には製塩遺跡が存在し、丘陵上には須恵器窯跡・住居跡・貝塚が存在しており、本市にとっては極めて特異な遺跡であることが判明いたしました。また、杉の入裏地内は古代塩竈の景観を残す貴重な地域でもあり、多賀城国府とのかかわりあいの中で古代塩竈が形成される時期を考察する上でも重要な遺跡と考えられます。

この報告書によって、本市のもつ歴史の一面が広く理解されることをご期待いたします。当教育委員会といたしましては、今後も文化財保存活動にいっそう努力して参りたいと思いますので、関係各位の深いご理解とご支援を賜りますようお願い申しあげます。

最後になりましたが、公務ご多忙の中報告書作成のためご尽力いただいた先生方に深く感謝の意を表し、発刊のことばに替えさせていただきます。

平成２年３月

塩竈市教育委員会
教育長　菅　野　　聰

例　　言

1　本書は岡崎運輸が施行した駐車場建設に伴う杉の入裏窯跡の発掘調査報告書である。

2　調査は塩竈市教育委員会が主体となり、塩竈市杉の入小学校教諭高橋守克が担当し、宮城県教育庁文化財保護課および宮城県多賀城跡調査研究所が終始協力した。

3　本書における土色についての記述には「新版標準土色帖」（1973年）を利用した。

4　遺構配地図は平版測量に1／100，遺構平面図、断面図は遣り方実測による1／20で作成した。

5　本書の第一図は建設省国土地理院発行の1／5万地形図「塩釜」「松島」を複製して利用した。

6　本書の作成に至る遺構、遺物の整理は宮城県文化財保護が主として行った。

7　本書は調査者間で協議しながら、進藤秋輝、真山悟、高橋守克が執筆編集した。

8　発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については塩竈市教育委員会が保管し、求めに応じて公開している。

9　本遺跡はこれまで貝塚や製塩遺構を包含する杉の入裏B遺跡として登録されていたが、今回新たに窯跡が発見された。したがって、今回報告書を発刊するにあたってはその内容を的確に示す意味で「杉の入裏窯跡」という表題にした。遺跡名は従来どおりである。

10　調査協力者：宮城県文化財保護課

進藤秋輝、真山悟、阿部恵、斉藤吉弘、鈴木真一郎、菅原弘樹

宮城県多賀城跡調査研究所

丹羽茂、後藤秀一、村田晃一

岡崎運輸代表取締役　岡崎多利夫

宮城県塩釜警察署宮城県巡査　藤原二郎

塩竈市文化財保護委員会　丹治英一

塩竈市職員

高橋利夫、井城信広、本田幹枝、阿部貞雄、

茂泉萬、西川信男、伊藤敏昭、鈴木奈津子

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1

Ⅱ　発見された遺構と遺物 …… 3

Ⅲ　まとめ …… 14

調　査　要　項

遺跡名及び所在地：　塩竈市杉の入裏窯跡
　　塩竈市杉の入裏字39番地の81

調査期間　　：　昭和63年４月22日～４月30日、５月25日、26日

調査主体者　　：　塩竈市教育委員会

Ⅰ はじめに

杉の入裏Ｂ遺跡は塩竈市の北東部にあたる塩竈市杉の入浦地内に所在する。この付近の地形をみると塩竈湾の海触作用による４本の半島が塩竈湾に向かって北東に延びている。これらのうち、最も東に位置するのが杉の入表半島であり、その西に位置するのが杉の入裏半島である。

杉の入裏半島の基部付近は北からの海触作用により２つ入江を形成している。このうち東の入江基部にあたる北斜面には奈良・平安時代のアサリ、カキを主体とした貝塚があり、本窯跡はその南斜面にあたる。

ところで、昭和63年１月22日に一市民から同貝塚を包含する地域で有限会社岡崎運輸の駐車場建設に伴う造成工事が行われている旨の連絡が塩竈市教育委員会にあった。同教育委員会は直ちに現地に赴き、現状を確認したところ北斜面にある同貝塚はほとんど破壊されていたものの、これらに関連する遺構が南斜面に広がる様相がうかがわれたため、遺構の存否を確認する調査が必要となった。塩竈市教育委員会と県文化財保護課はともに、工事者に対し確認調査についての協力を求め、快諾いただいた。

４月23日から４月30日まで、塩竈市教育委員会が主体となり、宮城県文化財保護課、多賀城跡調査研究所が協力して調査を実施した。その結果、奈良時代から平安時代の竪穴住居３棟と奈良時代の須恵器窯３基を発見した。特に塩竈市内での須恵器窯の発見は初めてのことであり、しかも塩竈市は工場、宅地建設にともなう造成工事が盛んで遺跡のほとんどが破壊をうけた地域であることから、調査の成果を踏まえて保存協議を行った。４月28日には緊急の塩竈市文化財保護委員会が開催され、同委員会は市長に対して保存、活用すべき旨を答申した。これを受けて、教育委員会並びに市当局は保存する方向で検討し、地権者と協議を重ねてきたが、代替用地の獲保等が困難であることから保存は不可能となり、遺構模型の製作、遺物の整理保存の方針と決定した。

５月25・26日に補足調査を実施し、工事に着手することになった。

塩竈市内の地質は硬質の凝灰岩を基盤としてその上に塩釜集塊岩層や砂質土が堆積することから、窯跡の存在は予想できなかった。しかし、凝灰岩を基盤とする谷合いでは、その上部に粘土層の堆積が見られ、窯跡群はこの分布の狭い粘土層に構築されている。生産可能な地域は最大限利用するという点は、この地域での須恵器生産のあり方の特色とみられる。

本遺跡の周辺には奈良・平安時代の貝塚や製塩遺跡が集中する。本遺跡の西の入江を中心として越の浦Ａ、Ｂ貝塚、杉の入裏Ａ貝塚、裏杉の入遺跡があり、本遺跡の東の小さな入江には杉の入裏Ｃ貝塚がある。東の杉の入表半島では南向の海浜に、この種の遺跡が集中する。縄文晩期から弥生時代を経て奈良時代の製塩遺跡である新浜Ｂ遺跡、江戸時代のカキ灰生産跡であ

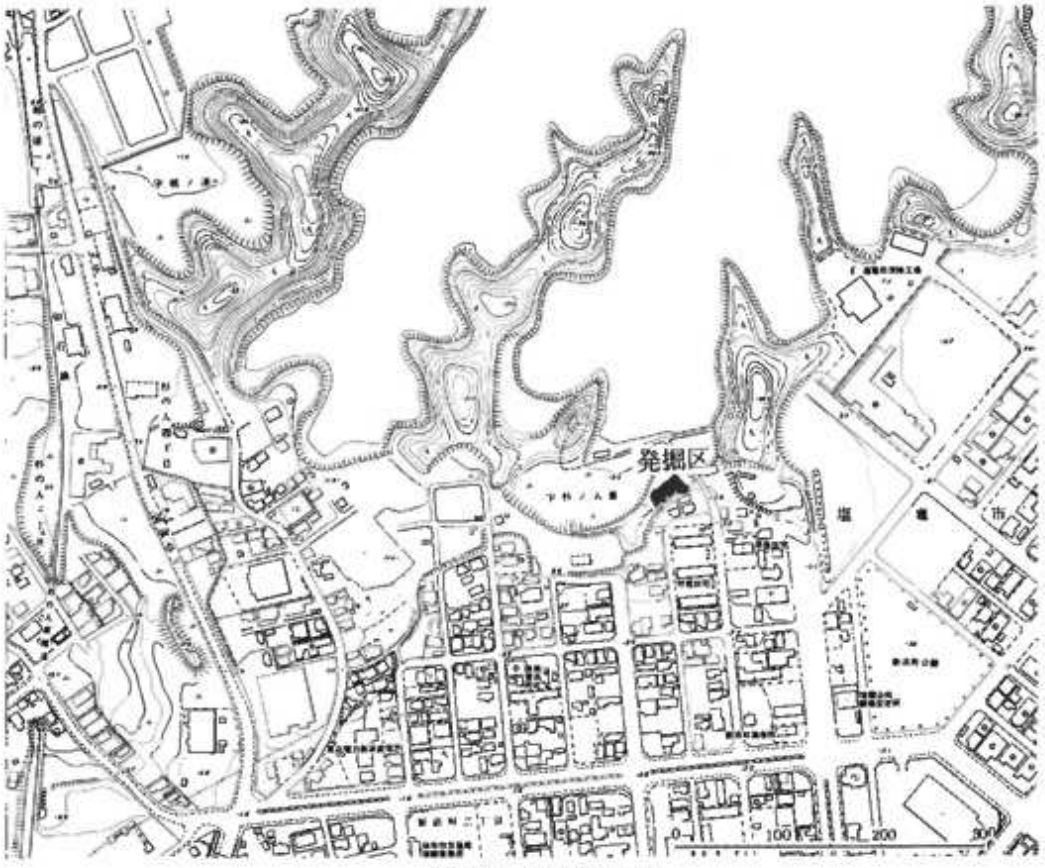
る新浜Ａ遺跡、弥生時代の洞窟遺跡である崎山囲洞窟遺跡、平安時代の土師器の標式遺跡である表杉の入貝塚の他、半島東の内裡島には５地点で奈良・平安時代の製塩遺跡や貝塚が形成されている。

このように、本遺跡をとりまく地域は奈良・平安時代における貝塚や製塩遺跡が集中する土地であり、塩釜神社の起源を解明するためにも重要な位置を占めていたことがわかる。

1.杉の入裏窯跡　2.杉の入裏Ｂ貝塚　3.裏杉の入遺跡　4.杉の入裏Ａ遺跡　5.越の裏Ｂ遺跡　6.越の裏Ａ遺跡　7.新浜Ａ・Ｂ遺跡　8.崎山囲洞窟　9.表杉の入貝塚

国土地理院　S55年松島1/5万　塩釜1/5万

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　発掘調査区

Ⅱ　発見された遺構と遺物

第１号窯跡（第４図）

発掘区の中央南寄りに位置する地下式窖窯である。煙道および燃焼室～前庭部は削平のため失われている。

〔焼成室〕　平面形は両側壁が平行し、先端部でやや細くなり、丸くおさまる。壁は下位がほぼ垂直に立ち上がるが、上位は崩落のため不明である。表面は青色に還元し、硬化している。床はほぼ平坦で、約10°の傾斜をもつ。壁同様に還元・硬化している。

（軸線の方向）Ｎ－63°－Ｗである。

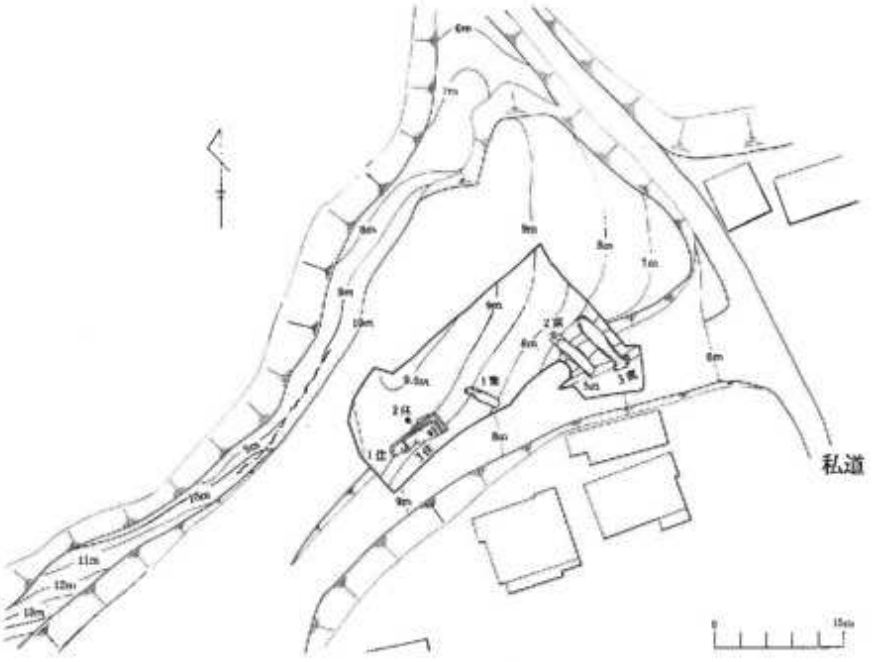
〔規模〕　焼成室－残存長4.3m、幅約1.0m、残存高約0.4m、確認面からの深さ約1.0m

〔出土遺物〕　堆積土中から須恵器・土師器片が出土しているが、図示できるものはない。

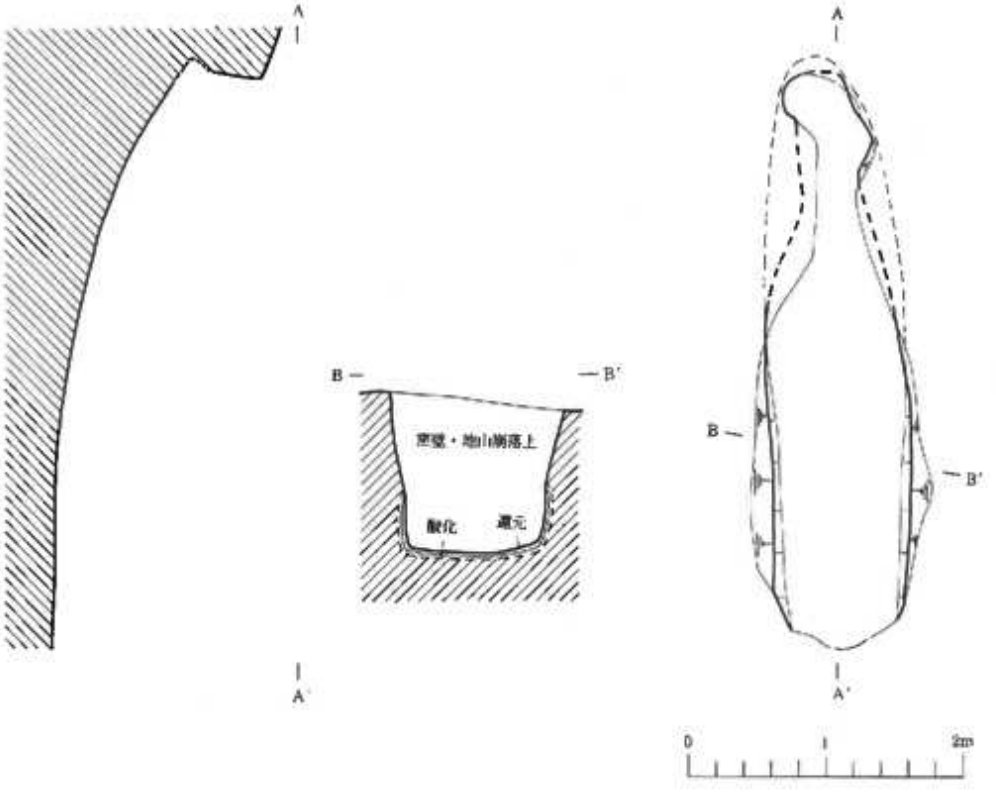
第２号窯跡（第５図）

発掘区の東南寄りに位置する地下式窖窯である。焚口部～前庭部は削平のため失われている。

〔煙道〕　窯の先端ややや手前に位置し、平面形は円形を基調とする。



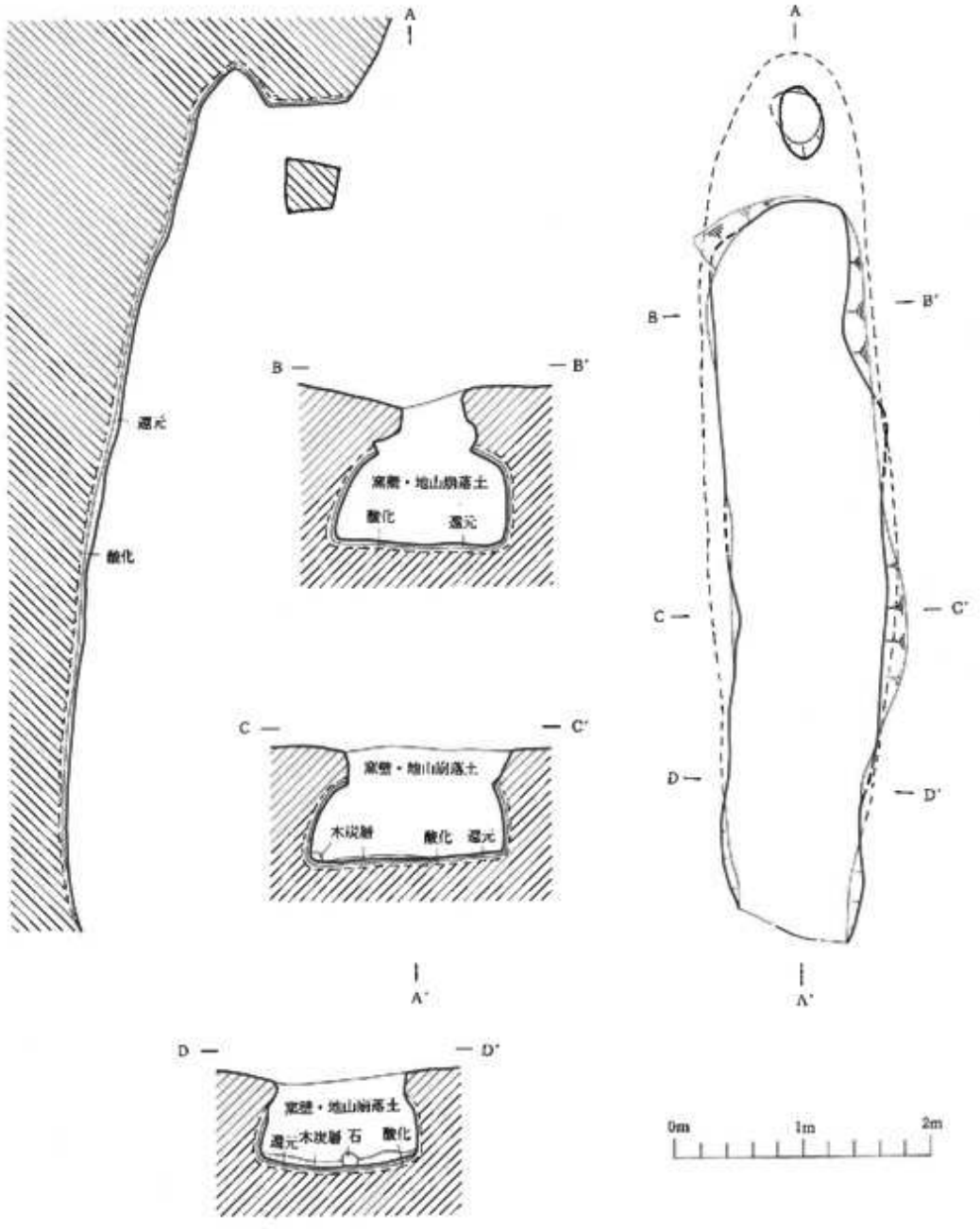
第３図　遺構配図



第４図　１号窯跡

〔焼成室〕　平面形は両側壁が平行し、先端部でやや細くなり、丸くおさまる。燃焼室との境は明瞭でない。壁は内弯して立ち上がり、断面形は半円形になる。床はほぼ平坦で、約20°の傾斜をもつ。壁・床とも表面は青く還元し、硬化している。

〔燃焼室〕　平面形は両側壁が焼成室へ向けてやや開く不整方形である壁は内弯して立ち上がり、断面形は半円形を呈する。表面は一部左側壁が青く還元している。床は中心部が浅く凹ん



第5図　2号窯跡

でおり、青く還元している。また上面には木炭層が堆積している。

（中心軸の方向）N－48°－Wである。

〔規模〕　全　体－残存長6.8m　確認面からの深さ1.2m

焼成室－長さ　4.6m　幅1.5m　残存高0.6m

燃焼室－残存長2.2m　幅1.3m　残存高0.5m

〔出土遺物〕　床面からの須恵器、堆積土中から須恵器・土師器が出土している。

須恵器（第6図1～6）坏・高台付坏・蓋・甕・擂鉢がある。

坏（1・2）1は器中位に稜をもち、稜から口縁部にかけて直線的に外傾する。底部は手持ちヘラケズリされている。2は底部から口縁部にかけて直線的に外傾する。2は底部から口縁部にかけて直線的に外傾する。底部にはヘラ切り痕が残る。

高台付坏（3・4）3は底部から口縁部にかけて直線的に外傾するもので、底部周縁に厚く短い高台が付く。4は底部・高台部の破片である。高台は底部周縁やや内側に付き、長く外側にふんばる。底部は回転ヘラケズリされている。

蓋(1)壺蓋である。天井部が平坦で、口縁部は急角度で折れ曲がり垂下する。つまみは欠損している。

甕(1)口頸部が長く大きく外反し、端部に縁帯をつくり出している。口頸外面上半に平行沈線と櫛描き波状文が交互に3段巡らされている。

擂鉢(1)体部下端～底部の破片である。底部は円盤状を呈し、体部は底部周縁の内側から外傾して立ち上がる。体部外面に櫛描き波状文が巡らされ、底部側面が底面にかけてヘラケズリが施される。

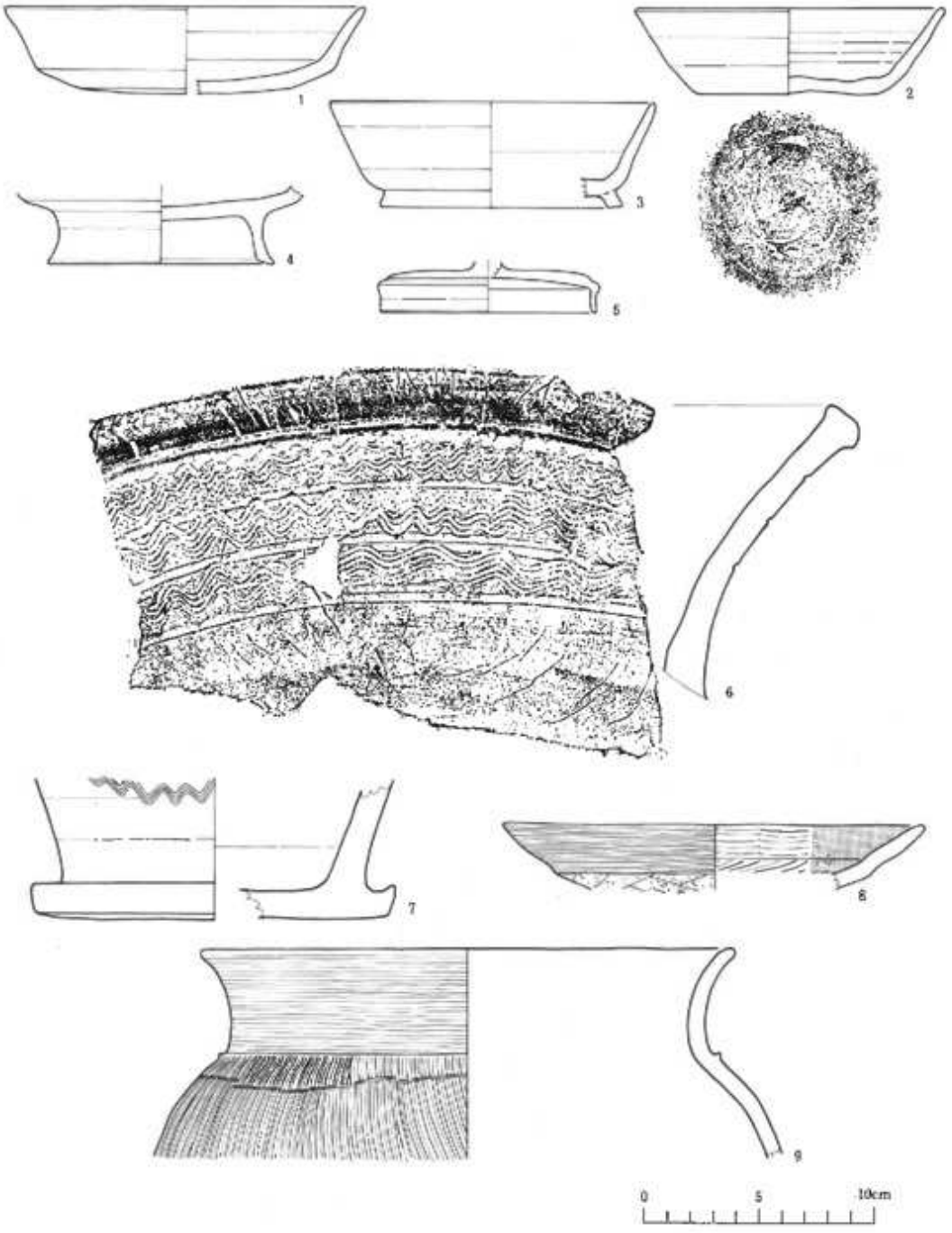
土師器（第6図8・9第7図）坏・甕がある。

坏（第6図8・第7図2・3）8は　底部が欠損する。器中位にかるい段をもち、段から上は強く外傾する。外面の段から上は横ナデ、下はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

2・3はロクロ使用のものである。底部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾しており、底部には回転糸切り痕を残す。再調整はない。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

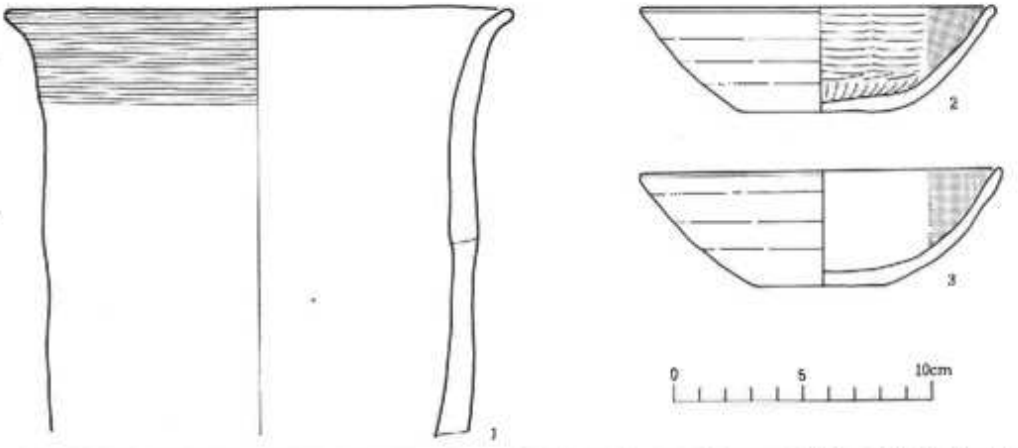
甕（第　図9・第　図1）9は体部が球形を呈するもので、頸部には段が巡り、口縁部は外反する。体部外面は刷毛目、口縁部外面は横ナデの調整が施され、内面は一部にナデ調整がみられる。

1は長胴形の甕である。体部上半はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁部外面に横ナデ調整がみられるが、他の部分は磨滅のため不明である。



No.	層位	種類	器種	備考	No.	層位	種類	器種	備考
1	床	須恵器	坏	底部ー手持ちヘラケズリ	5	埋土	須恵器	蓋	壺用蓋
2	埋土	須恵器	坏	底部ーヘラ切り	6	埋土	須恵器	甕	外面ー櫛描き波状文 平行沈線
3	埋土	須恵器	高台付坏		7	埋土	須恵器	擂鉢	外面ー櫛描き波状文
4	埋土	須恵器	高台付坏	底部ー回転ヘラケズリ	8	埋土	土師器	坏	外面ー横ナデ、ヘラケズリ 内面ーヘラミガキ、黒色
					9	埋土	土師器	甕	外面ー横ナデ、刷毛目

第6図　2号窯跡出土遺物(1)



No.	層位	種類	器種	備考					
1	埋土	土師器	甕	口縁外面ー横ナデ	2	埋土	土師器	坏	内面ーヘラミガキ，黒色 底部ー回転糸切り
					3	埋土	土師器	坏	内面ーヘラミガキ，黒色 底部ー回転糸切り

第７図　２号窯跡出土遺物(2)

第３号窯跡（第８図）

発掘区の東南端にあり、２号窯と隣接・平行する地下式窖窯である。崩落や削平により、煙道および前庭の一部が失われている。

〔焼成室〕　平面形は第１・２号窯と大きく異ならないが、中央にやや膨らみをもつ胴張形になる。燃焼室との境は明瞭でない。壁は内弯して立ち上がり、断面形は半円形になるものと推定される。表面は青く還元され、硬化している。床は大部分が平坦な単一面であるが、一部燃焼室寄りの部分で２面確認された。古い面は燃焼室との境に深さ20cmほどの舟底状のピットがみられ、それに対し新しい面はそれを埋めて形成されている。その部分も古い面ほど顕著ではないが、やや凹んだ状態になっている。傾斜角は両面とも約15°であり、古い面は舟底状ピットを除く部分、新しい面は全面が還元・硬化している。

〔燃焼室〕　平面形は両側壁がほぼ平行する長方形である。壁はわずかに内傾するが上部が欠損しており、断面形は不明である。床は焼成室寄りの部分で２面ある。焼成室から続くもので古い面は舟底状のピットになっており、新しい面はそれを埋めた層の上面である。表面は前者が浅く凹むのに対し、後者はほぼ平坦である。また後者の焼成室寄りの部分が還元・硬化している。

〔焚口部〕　特に施設はない。

〔前庭部〕　焚口部から両側に若干張り出した。不整の土壙状の平坦面である。壁の立ち上がりは急角度で、壁沿に周溝が巡る。（中軸線の方向）N－45°－Wである。

〔規模〕　全　体ー残存長7.9m　確認面からの深さ1.5m

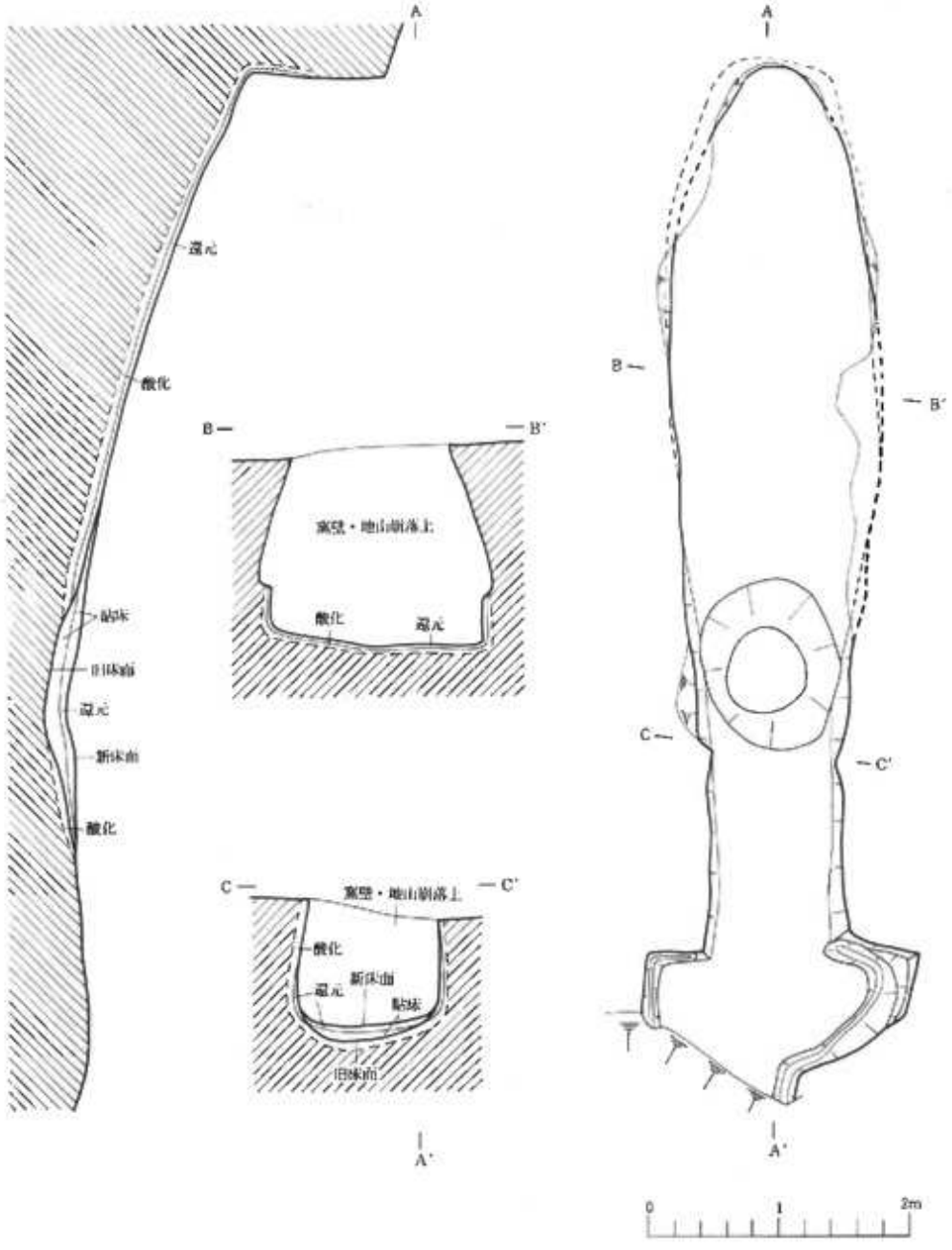
焼成室－長さ　5.0m　幅1.6m　残存高　0.4m

燃焼室－長さ　1.7m　幅0.9m　残存高　1.1m(中)，0.9m(南)

焚口部－　　幅0.9m　残存高　0.5m

前庭部－残存長1.2m　幅2.1m　残存高　0.4m

〔出土遺物〕　堆積土中から須恵器が出土している。



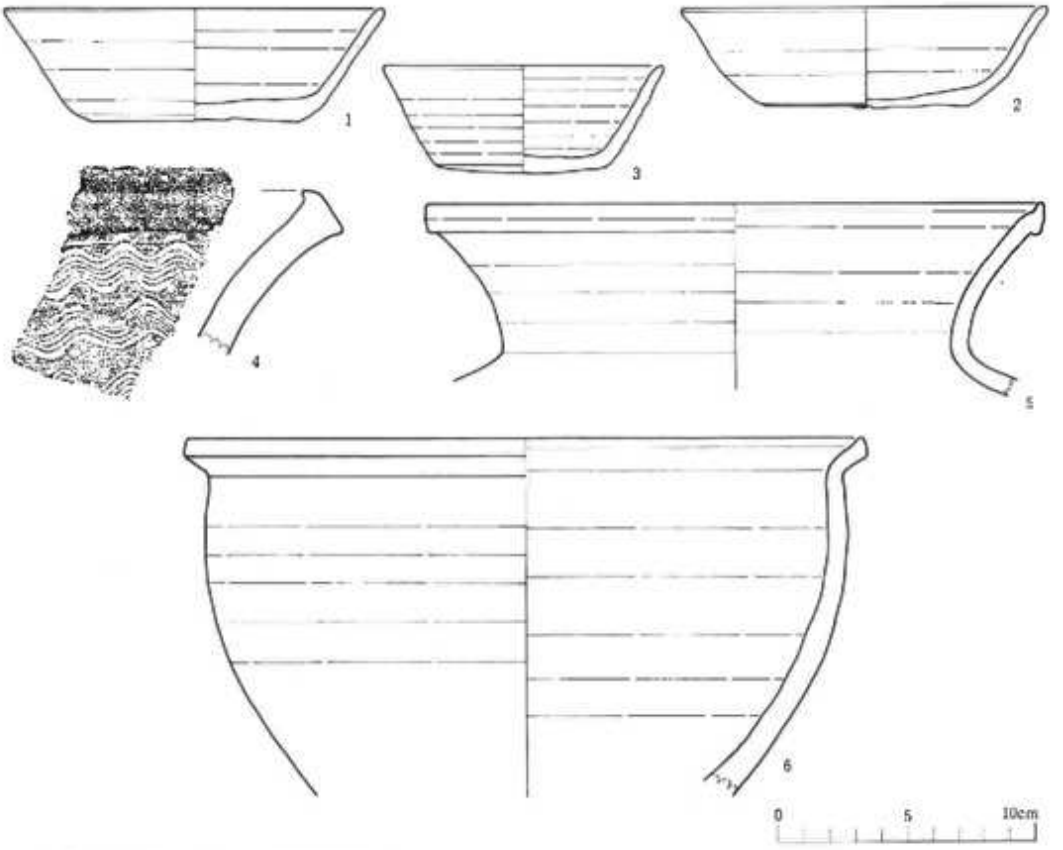
第8図　3号窯跡

須恵器（第９図１～６）坏・甕・鉢がある。

坏（１～３）いずれも口縁部は直線的に外傾しており、底部はヘラ切り痕を残す。このうち３は他に比して小形かつ深めのもので、底部形態も若干丸底風をなすのが異なる。

甕（４・５）ともに口頸部が長く大きく外反し、端部に縁帯をつくり出している。このうち１は大形で、口頸部外面に櫛描き波状文が巡らされている。

鉢①体部は丸みをもって立ち上がり、頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は短く外傾する。口縁部は縁帯状になる。



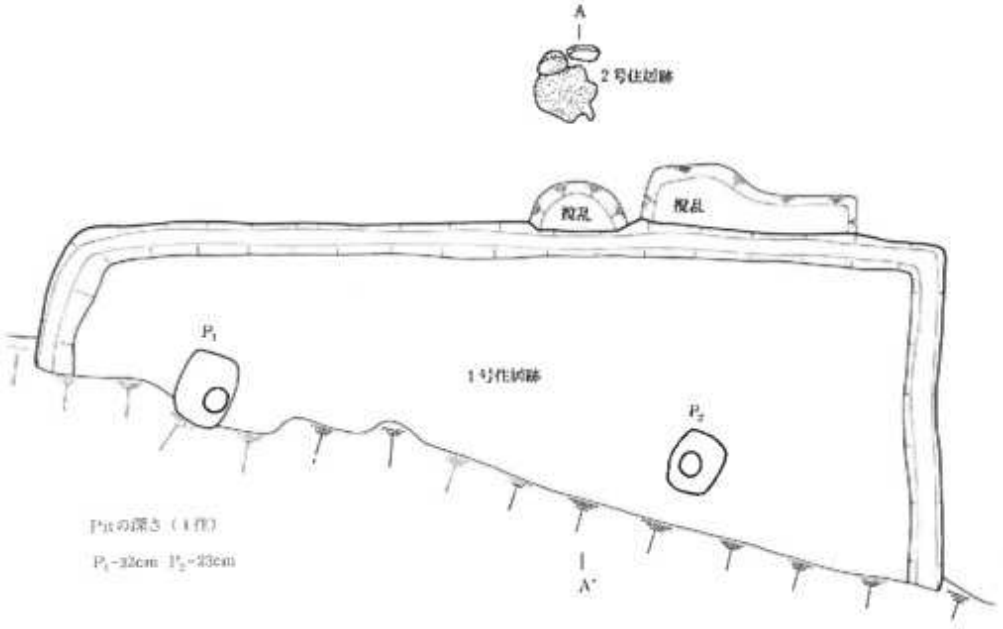
No.	層位	種　類	器種	備　　考	4	埋土	須恵器	甕	口縁外面 一櫛描き波状文
1	埋土	須恵器	甕	底部一ヘラ切り	5	埋土	須恵器	甕	
2	埋土	須恵器	甕	底部一ヘラ切り	6	埋土	須恵器	甕	
3	埋土	須恵器	甕	底部一ヘラ切り					

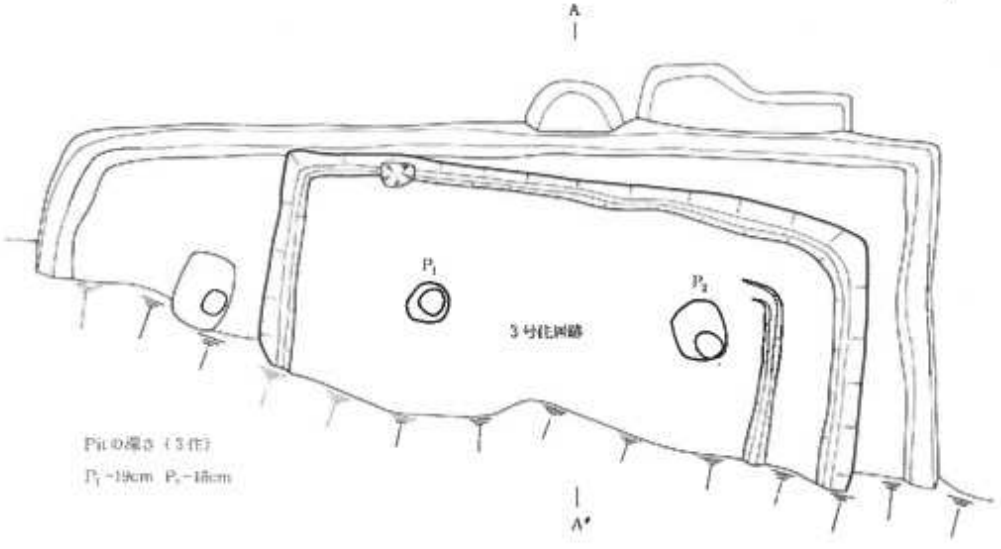
第９図　３号窯跡出土遺物

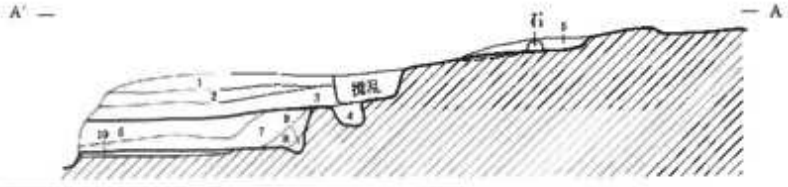
第１号住居跡（第10図）

〔位置・重複〕　発掘区の西寄りに位置する。２・３号住居跡と重複しており、３号住居跡を切るが、２号住居跡との関係は不明である。

〔平面形・規模〕南半は削平されているが、方形を基調とするものである。規模は北辺で6.3







1	褐色シルト	灰白色火山灰粒・地山ブロックを含む	1住土層
2	暗褐色シルト	焼土・木炭を含む	
3	灰褐色砂質シルト		
4	黄褐色シルト	地山ブロックを含む、周溝内堆積土	
5	暗褐色シルト	焼土・木炭を含む	2住土層
6	褐色砂質シルト	地山ブロックを含む	3住土層
7	黄褐色砂質シルト	木炭・地山ブロックを含む	
8	褐色シルト	木炭・地山ブロックを含む	
9	褐色シルト	周溝内堆積土	
10	褐色シルト	地山粒を含む，粘床で固くしまっている	

第10図　1～3号住居跡

m、残存部が長い東辺で2.5mである。

〔堆積土〕　褐色ないし暗褐色土で３枚に分かれる。最上層には灰褐色火山灰が混入する。

〔壁〕　立ち上がりは垂直に近く、壁高は残存状況の良い西壁で40cmである。

〔床面〕　地山および３号住居跡堆積土を床としている。ほぼ平坦であるが、３号住居跡堆積土部分は若干凹んでいる。

〔柱穴〕　２個のピットが検出されている。ともに住居跡の対角線上に位置するとみられ、柱穴と考えられる。

〔周溝〕　壁沿いに巡る。断面形は逆台形で、幅20～30cm、深さ約10cmである。

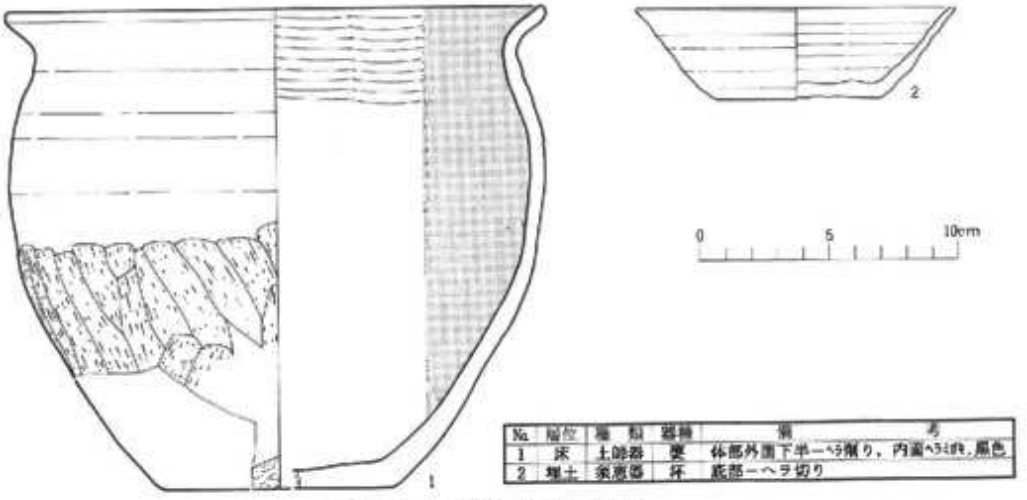
〔出土遺物〕　床面から土師器甕が、堆積土から須恵器坏が出土している。

土師器甕（第11図１）

鉢形の甕である。ロクロ使用のもので、体部上位に膨らみをもち、頸部で括れ、口縁部が短く外傾する。外面上半はロクロ調整、下半はヘラケズリされ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

須恵器坏（第11図２）

底部～口縁部が直線的に外傾するもので、底部にヘラ切り痕を残す。窯跡出土のものに比して小形で、底部が小さい。



No.	層位	種類	器種	備考
1	床	土師器	甕	体部外面下半ヘラ削り，内面ヘラミガキ，黒色
2	埋土	須恵器	坏	底部ヘラ切り

第11図　１号住居跡出土遺物

第２号住居跡（第10図）

〔位置・重複〕　１号住居跡のやや北に位置し、それと重複するが、削平のため、切り合い関係は確認できない。

〔平面形・規模〕　削平のため平面形・規模は不明である。

〔堆積土〕　焼土・木炭を含む暗褐色土で、北壁際にわずかに残存する。

〔壁〕　北壁が残存する、立ち上がりは急角度で、壁高は約10cmである。

〔床〕　北壁際に残存するのみである。地山を壁としている。

第３号住居跡（第10図）

〔位置・重複〕　第１・２号住居跡と重複しており、１号住居跡に切られている。２号住居跡との関係は不明である。

〔平面形・規模〕　南半は削平されているが、方形を基調とする。規模は北辺で4.2m、残存部が長い東辺で1.9mである。

〔堆積土〕　褐色ないし黄褐色土で、３枚に分かれる。各層に地山ブロックが混入している。

〔壁〕　立ち上がりは垂直に近く、壁高は残存状況の良い北壁で約30cmである。ただし、その上部にある１号住居跡の堆積土の厚さや壁高から判断して、本来の高さは60cm以上あったものとみられる。

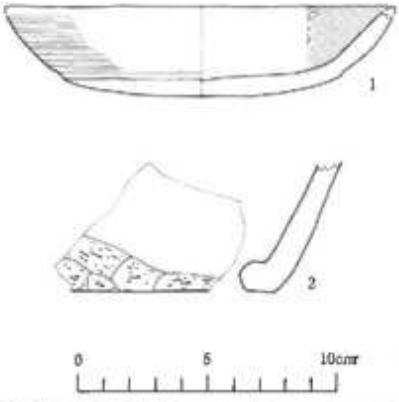
〔床面〕　周辺部は地山、中央部は掘り方埋土を床としている。ほぼ平坦である。

〔柱穴〕２個のピットが検出されている。ともに住居跡の対角線上に位置するとみられることから、柱穴と考えられる。

〔周溝〕　壁沿いに巡る。幅約15cm、深さ約３～４cmで、かなり浅い。

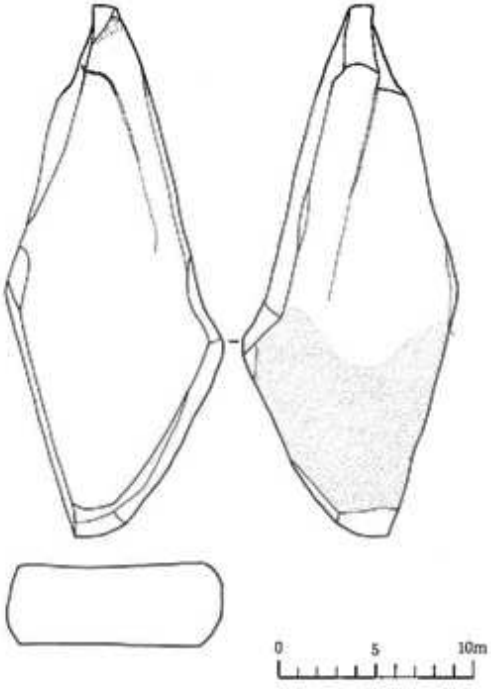
〔出土遺物〕　床面から土師器坏・甕　砥石が出土している。

土師器坏（第12図１）



No.	層位	種類	器種	備考
1	床	土師器	坏	外面ー横ナデ、ヘラケズリ、内面ーヘラミガキ・黒色
2	床	土師器	甕	単孔式、外面ーヘラケズリ、内面ーナデ
3	床	砥石		砂岩、重量ー g

第12図　３号住居跡出土遺物(1)



第13図　３号住居跡出土遺物(2)

丸底の坏である。底部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がるもので、器中位にかるい段が巡る。磨滅が激しく器面調整は明確でないが、外面の段から下はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

土師器甑（第12図２）

底部の破片である。平底単孔のもので、外面はヘラケズリ、内面はナデ調整されている。

砥石（第13図）

厚さ約４cmの板状の砂岩を利用して簡単に整形したもので、平面は菱形を呈する。表裏２面を使用している。

Ⅲ　ま　と　め

本遺跡は松島湾に張り出した杉の入裏半島の丘陵南斜面に立地している。今回発見された遺構は地下式窖窯３基と竪穴住居跡３軒である。これらの年代を出土した土器から検討すると次のようになる。

窯跡については出土須恵器に坏・甕・蓋・擂鉢がある。このうち特徴の明瞭な坏では、底部がヘラ切り無調整のもの(1)と手持ちヘラ削りされるもの(2)とがある。器形は１では底部～口縁部が直線的に外傾するが、２では器中位に弱い稜をもつ。１は涌谷町長根窯跡（岡田茂弘他：1972)、２は利府町硯沢窯跡（藤沢邦彦他：1987）に類例があり、それぞれ８世紀中葉・８世紀後半に位置付けられている。

これらの本窯での出土状況は、２号窯で１と２の両タイプがあり、３号窯では１タイプのみである。大部分は床面ではなく窯内堆積土出土のもので、必ずしも良好な年代決定資料ではないが、より新しい須恵器の伴出はみられないことから２つの窯の年代の下限を奈良時代すなわち８世紀後半に比定することが可能である。その他１号窯の年代は推定しうる出土資料がなく不明であるが、その形態からみて２・３号窯と大きく異ならないものであろう。なお、２号窯堆積土から土師器が出土している。大部分は上記の須恵器の年代に近いものと思われるもののほか、第71図２・３のように平安時代のものも混入している。

住居跡は切り合い関係から３号住居跡が１号住居跡が１号住居跡より古いことが明らかである。出土遺物によると、３号住居跡は床面から８世紀前半～中ごろのものと思われる有段丸底の土師器坏が出土している。この１点のみで厳密な年代の対比はできないが、窯跡との位置関係から窯跡関連の建物であった可能性も考えられよう。この他１号住居跡は床面から平安時代の土師器甕が出土しており、明らかに窯跡とは年代の異るものである。また２号住居跡につい

ては出土遺物がなく、年代は不明である。

本窯跡については8世紀後半を下限とすることが明らかとなったが、その立地状況はこれまで知られた窯跡と若干異なっている。すなわち窯跡が検出されたのは凝灰岩層を基盤とした薄い砂質層が大部分を占める地質環境のなかにあって谷に面したなかでも粘度層が堆積する限られた部分である。このような必ずしも良好でない地質条件下での小規模な窯業生産のあり方は、前途の硯沢窯跡や、色麻町日の出山窯跡群（岡田茂弘：1970）のような広い範囲内にいくつかのまとまった群をなす形態とは趣を異にしており、本遺跡の一つの特徴といえよう。

引用参考文献

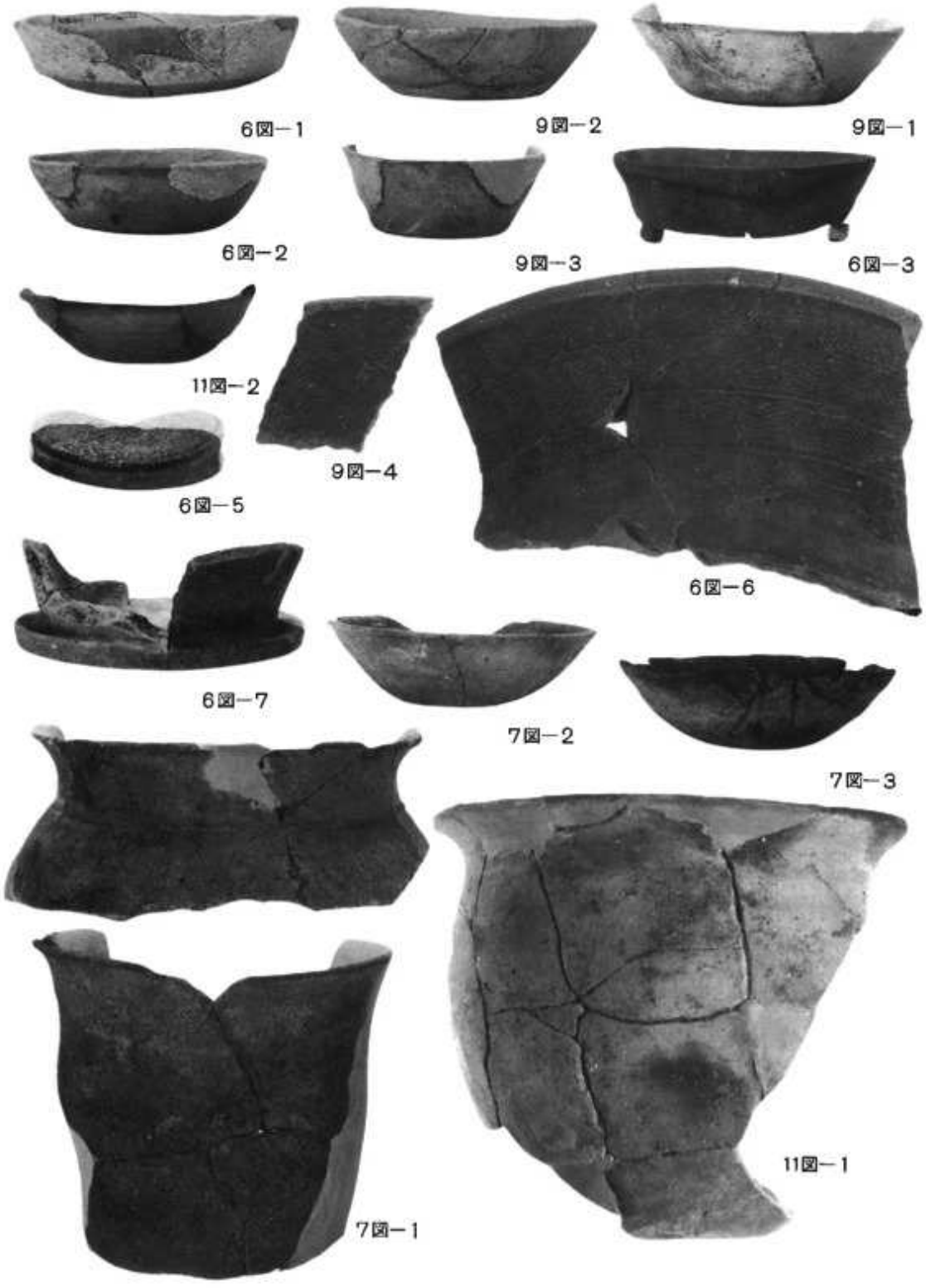
氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第8輯

氏家和典（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって―奈良・平安期土師器の諸問題―」『柏倉亮吉教授還暦起算記念論文集』

岡田茂弘他（1970）：「日の出山窯跡群」『宮城県文化財調査報告書』第22集

岡田茂弘他（1972）：「長根窯跡群」Ⅱ

藤沼邦彦他（1987）：「硯沢・大沢窯跡ほか」『宮城県文化財調査報告書』第116集



図版３　出土遺物